

月刊

地域保健



●座談会

緊急事案にどう対処するか

●FRONT RUNNER

神栖市健康福祉部長寿介護課課長

向山和枝さん

●PEOPLE

NPO法人ブリッジフォースマイル代表

林 恵子さん



向山和枝さん

● 神栖市健康福祉部長寿介護課 課長

若いころを知っているから高齢者が分かる

母子から高齢者まで一貫して支える保健師の目



逆境を乗り越えてたくましく成長していく人生と、運や周囲のサポートに恵まれ穏やかに成長していく人生と――

もし選べるとすれば、あなたはどちらを選ぶだろうか。今月のFRONT RUNNERでご紹介する向山和枝さんの半生は後者にあたるだろう。

向山さんは茨城県神栖市（現・神栖市）の出身。茨城県立看護専門学校保

健助産学科を卒業すると同時に、地元から車で1時間ほどの距離にある上浦

とはいっても、小さな町で助産師の働き口を探すのは難しい。保健師ならば好きな母子保健にも携わると、神栖町に就職したのが1980年。向山さんは地元で保健師として新たなスタートを切った。

一入つてみると、当時は乳児健診のシステムがほとんど整備されていませんでした。同じ日に同じ会場で3カ月児から12カ月児までを一緒にみていたんです。それから、病院勤務では注射は、ディスボーザルが当たり前でしたが、

市の病院に助産師として就職した。

予防注射で1本の針で使い回しをしていた時代で

「赤ちゃんを取り上げることが大好きで、迷わず助産師の道に進みました。ところが就職して2年目のとき母に『地元に帰ってきてほしい』と言われ、母子家庭ということもあり、神栖に戻ることにしたのです」

神栖に限らず、当時の行政がこの問題への対応が遅れていたのは周知のとおり。驚いた向山さんは注射針の使い回しの危険性を訴えた。新人の「忠告」は聞き届けられ、注射針の使い回しなくなつた。

PHNの鏡のよう な大先輩

同期には保健師がもう一人、先輩は二人いた。そのうち一人は親子ほどに年離れた大先輩だった。佐伯運子さんというその保健師は、気管支拡張症を患い、いつも呼吸苦の中で仕事をしていた。

「バイクの荷台に幻燈機を乗せて、毎日のように砂利道を走って地域に出向いていたそうです。スライドで乳児死



緊急事案に どう対処 するか

初期アセスメントとバックアップ態勢



神楽岡 澄さん



本田浩子さん

○東京都町田保健所（現・町田市保健所）

都市部を中心に増えているといわれる緊急事案。電話から得られる限られた情報で初動の方法を決めるなど、難しい判断を迫られることが多く、経験の少ない保健師にとっては非常にストレスフルな事例となりやすい。対処法を間違えると身の危険にさらされたり、心に傷を負ってしまったりするため、組織的なバックアップも欠かせない。

緊急事案にうまく対処する方策について、初期アセスメント、組織的なバックアップ、外部機関との連携などのポイントで話し合っていただいた。

●

新村順子さん

○東京都精神保健会議会議員研究会（現・東京都医学総合研究所）

●大木幸子さん
○杏林大学

「元気にする」 「元気をもらう」は 表裏一体

一島一村の小さな村から保健師を始めて

かわさのぞみ
三宅希実さん

●大分県東国東部姫島村健康推進課

◀砂浜が広がる姫島海水浴場。近くにキャンプ場もある



◎取材・文・写真
西内義雄
(医療・保健ジャーナリスト)

国東半島北の端にある伊美港から中型のフェリーに乗り込むと、すでにその島は見えていた。気持ちのいい潮風を浴びながらおよそ20分の航海で到着したのが姫島だ。

船舶待合所から少し歩くと信号機のある交差点。周囲は閑静な住宅地といつた趣で、きれいに整備されている。

姫島村は漁業以外に職が少なく、役場職員の給料を抑えてワーキングシェアリングしていると聞いていたが、環境整備はかなり進んでいる印象を受けた。港から歩くことおよそ5分。国民健保診療所と地域包括支援センターが入っている建物が見えてきた。ここに2階に勤務しているのが今回の主人公、平成22年度採用の三宅希実さんだ。

注射する人は嫌い

三宅さんは大分市生まれの23歳。

「幼稚園のころは『看護婦さんは注射するけんイヤだ』と嫌っていたはずなのに、当時のノートには『看護婦さんになりたい』と書いていました」(笑)

小さなころから看護職への意識はあつたようだ。小学校では学校の先生になることも意識した。その背景を尋ねると、母親が看護師。父親は公務員で

「父はかつて学校の先生になりたかったようですが、私は夢を託した時期があつたらしく、私に夢を託した時期があつたようですね」

とのこと。ちなみに、ひよこ保健師の取材では両親のどちらかが公務員、あるいは母親が看護師というケースが多く、専門職というのは子どもに与える影響も大きいものだと感心している次第だ。

医療職への興味が勝ったのは中学生になつてからだ。

「ある日、祖母が倒れて急遽入院することになったのです。そのときの母の



▲家族の温かさが伝わるひな祭りの写真

初期対応がとても頼もしく思えました

母の看護師としての技量を目の当たりにすることで目指すものは決まりました。さらに、3年生のときには家庭教師をしてもらった大学生が看護学科に在籍していたことも影響し、まず地元の県立高校に入学。